

妄想における他者と自己

長 野 郁 也

I. はじめに

妄想をその主症状とする精神病水準の二症例を「他者」及び「自己」という二つの観点から考察する。本論文での考察の目的は、妄想患者の精神病理学的考察を通じて、妄想患者に対する治療的接近の為の手がかりを見いだすことである。

II. 症 例

①待方夢子（昭和5年生まれ、女性）

父親は木材流送の仕事をしていたが、酒飲みで芸者遊びが好きで、母親は苦勞したという。尋常小学校卒業後、昭和19年から木材会社での事務の仕事の皮切りに様々な職業を転々とし、昭和29年、上京して働いていた印刷会社の工具と結婚し、二子をもうけるが、夫が愛人をつくったために、昭和35年離婚。子どもは夫が引き取り、その後、電気会社の事務の仕事をしていた頃より妄想的関係づけがあらわれ始め、昭和40年頃初回入院。以後入退院を繰り返すが、昭和45年頃より働いていた製鋼会社の男子工具（「金田充」）に恋愛感情を抱き始めた頃より再び妄想が再燃し、昭和46年入院。現在に至る。

現在は「夫」である「金田充」をテーマとした恋愛妄想を中核として「双子の女の子がいる」という妄想、同じ病室に入院している男子患者を「金田充」とする人物誤認が主症状である。

②春野鋳吉（大正13年生まれ、男性）

G県の「これ以上の田舎はない」ような所に育つ。父親は農業を営んでいたが、明治生まれの厳しい人だった。尋常小学校卒業後、農業に従事していたが、その後、鋳山や造兵工場で働いていた（兵役の経験もある）。昭和21年に結婚してから、T町の運送会社に就職した。

昭和47年前後に、実母、妻、長男が続けて死去。また同じ頃、T町からK市に転居し、職場も変わるようになる。この頃から、関係妄想的と推定される体験が始まり、昭和52年、駅に置きざりにされた遺骨を自宅に持ちかえった頃より、再び関係妄想的体験が始まる。

昭和54年定年となり、別の運送会社に再就職するが、会社の同僚が自分を監視している、ラジオで自分のことを悪く言っている、と訴え始め、初回来院。以後外来通

院を続けて、現在に至る。

現在は、暴力団が自分をつけ狙っているという被害妄想が主症状である。

III. 考 察

①妄想における他者

二人の妄想患者によって体験される他者の在り方をここでは考察する。

a. 待方夢子の恋愛妄想における他者

1. 発病以前の時期における他者

明確な発病以前に、妄想的と推定される体験が生じている。「電気会社」での一件がそれであり、そこでは、いずれの場合も、待方さんの主体性とは遠い所にある他者の意図が彼女の生を翻弄している（会社から妾を追い出す為に駆り出される、電気会社の仕事を依頼した男と「ひっつけ」られそうになる）。この時期の他者は、待方さんにとって「無気味な意図」を担った他者である。

2. 発病時における他者

昭和40年頃、明確な発病における他者体験は、かつての菓子工場の同僚がタクシーに乗って、彼女の家の回りをグルグル回っており、他のタクシーも「結束」していたというものであり、これは「患者自身を指向するある特定の意図が存在し、患者の周囲の他者は、その意図に沿った行動をしている」と表現することができる。

3. 金田充と知り合ってから以後の他者

金田充と知り合ってから、待方さんの病的体験は一層深まる。そこでは他者は「金田充と待方夢子の恋愛関係」というテーマに即して意味づけられた他者としてあらわれる。

4. 現在症における他者

現在は、恋愛妄想を中心として待方さんの他者世界は構成されており、待方さんの周囲の人物は総てこの恋愛妄想の枠内で体験されている。そこでは、以前のテーマが更に発展して「金田充と待方夢子の夫婦関係・家族関係」というテーマに即して他者が意味づけられていく。

5. 妄想的他者における具体的他者のイメージ

待方さんの妄想には2人の登場人物があらわれる。まず「夫」である「金田充」においては、実在の金田充さんのイメージが担わされていると共に「金田充」の内に

待方さんの見たポジティブな男性イメージの背景には、一群のネガティブな男性イメージ（父親、前夫、菓子工場の元同僚）が存在する。次に「双子の子ども」においては、結局別れて暮らすことになった二人の息子のイメージが担わされている。

b. 春野鎌吉の被害妄想における他者

1. 発病以前の時期における他者

明確な発病以前に生じた、妄想的と判断される他者体験が3つある。T町からK市に引っ越した頃の体験、遺骨の一件の後と体験、運送会社を退職した頃の体験である。いずれの場合も、そこに登場する他者は「何か得体がしれないし、その正体もはっきりとはしないが、患者に対してよくない考えや意図を持ち合わせている他者」と表現できる。

2. 発病時における他者

明確な発病時、会社の同僚に対する被害感及びラジオによる個人的迫害においては「より積極的に患者を侵害してくる他者」が現れてくる。

3. 現在症における他者

現在は「暴力団」という他者認知の枠組で春野さんの他者世界は構成されており、他者は、服装、顔つき、髪形、一時的な行動といった、いわば表面的な特徴から「暴力団」というテーマに即して一括されている。

4. 妄想的他者における具体的他者のイメージ

春野さんの妄想に登場する妄想的他者（「暴力団」）は、彼にとって「こちらを威圧するような者」であり、私が春野さんの話を聞いて受けた印象によると「あつかましく」「がさつ」なものであると思われる。こうした「暴力団」のイメージの内には、明治生まれの厳しい父親、軍隊時代の上官、といった人々のイメージが重ね合わされている。

c. 妄想的他者の特徴

二人の患者のどちらにおいても、その妄想に出現する他者は、当初、非友好的で無気味な姿で現れ、患者を脅かし、その後、個人としての独自性を剥奪され、その内面における個人特異的な体験の流れを捨象され、その表面に単調な妄想テーマを《付着》させられた他者として結実する。患者の側から言えば、妄想とは、独立自存の

一人の独自の個人と関係を持つことの障害であるといえる。

②妄想における自己

妄想内容と患者の生活史との関連をここでは考察する。

a. 待方夢子にとっての恋愛・結婚・恋愛妄想

待方さんが妄想の中で関係を持っているのは、愛する夫と子供達であり、それは現実生活の中では、入院までついに達成されることになかった彼女の「恋愛から結婚へ」という課題と密接に関連している。事実、前夫との不幸な離婚以降、待方さんが危機的状況に陥り、病的体験をつのらせ、ついには入院に至ることになったのは、全て「男女関係」をめぐるエピソードなのである（電気会社での一件、金田充との出会いを参照）。

b. 春野鎌吉にとっての故郷・共同体・被害妄想

春野さんにとって、暴力団をテーマとした被害妄想は、春野さんの自然・故郷・共同体への指向と密接に関連している。事実、こうした指向性にとっては危機的な状況において、一連の妄想的体験が生じている（例えば、前妻、実母、長男の死去。T町からK市への転居。職場の移動）。

c. 妄想における自己（まとめ）

妄想の内には、患者の生の意味方向が示されており、妄想は患者の自己の表現でもある。

③治療論的考察

以上の考察から、治療の手がかりを導出する。

**a. 「他者の妄想的体験構造」から導出される治療的
手がかり**

患者と治療者との関係において、患者と治療者の双方が独自の個人としてたちあらわれてくるような状況を設定することが必要である。

**b. 「患者自身の生の意味方向」から導出される治療的
手がかり**

患者の生の意味方向を、患者と共に、ある一定の合意事項にまで集約し、それを現実に実現できるよう患者を援助することが必要である。

注：文中の人名、地名は全て仮名である。